

## 補足 英語所有構文の日時の表現について

平見 勇雄

### A study on the temporal expressions of the English possessive genitives

Isao HIRAMI

#### Abstract

In 2019, I published a book called “A study on the English possessive genitives”, and thanks to some professors who gave me some useful comments, I thought that I should have explained temporal genitives more in details.

So I would like to add some explanations to it.

**Key words** : the English possessive genitives, temporal expressions

キーワード : 英語所有構文, 日時の表現, 補足

#### はじめに

一昨年の暮れに『英語の所有構文に関する考察』という本を出版した。学生時代から疑問に思っていた所有構文を大学院の時の修士論文のテーマとし、長年研究してきた考えをまとめたものである。その後、本を読んで下さった数人の先生方よりいくつかの示唆に富んだご指摘をいただいた。そしてその中であつた質問から、もう少し説明を加えたほうがよいと思われる箇所があつた。日時の表現に関する内容である。

日時の表現(例:today’s newspaper)はA’s Bを使って表される他の用例と接点が見出しにくかつたこともあつて、日時の代表的な表現と他の用法との重要な共通点を示した以外、詳細に説明していなかつた。

昨年の紀要論文を最後に、所有構文に一応の区切りをつけるつもりであつたが、本や紀要を読んで下さつた方達に、より丁寧な説明を最後に補足として付け加えておきたい。

#### 1 日時の表現とA’s Bの形式で表される他の表現との違い

A’s Bという形式において日時の表現がA’s Bで表される他の表現と決定的に違つたのはAの性質である。多くの例はほとんどが人、あるいはその延長線上にある語であつた。たとえば所有関係(my book)、部分全体関係(your leg)、動詞派生名詞の関係(Kennedy’s assassination)、具体-抽象の関係(John’s

character) などである。これらの例からわかるようにAは人を意味する語となっている。その中に見異質と思われる日時表現が用例にあったからだ。

なぜ大半の例は人なのか。Aは人間にとって関心の高いものが来る。ここでは詳しい説明に立ち入らないが、根底に英語という言語には人間中心的な表現が反映されていることと関係している。その性質がAという語の選択に重要な役割を果たしているとなると、おそらく所有構文にもそれが反映されているであろうことは容易に想像できる。したがって直接は人を指さないが背後に人で組織されていることを想起させるgovernmentのような語が人に準ずるものとして見做せることは理解できるだろう。

また人は生物であるから動く。事実、動くという特徴を持つものはAに来る可能性が高い。なぜ動く特徴が重要なのか？それは人間の持つ生物学的特徴からだ。人は動くものに生まれつき注目する性格を備えている。自分の身を守る、あるいは食料としての対象を獲得するという事柄は生存に必要な能力だからだ。だから動くという特徴は他の特徴よりも重要な要因になる。そうすると生物ではあっても植物のように動かないものは注目の対象にならず、逆に生物ではないが、動くもの（たとえば列車など）がこの表現で表されやすい性質を持つのも納得できる。

典型的な生物から非典型的である（つまり基本的には対象外となる）無生物まで徐々にその容認度を下げながら段階性をもってAの内容が決まる。ただどこが境目になるかはわからない。特にグレイゾーンにかかるような表現は正しいかどうかの判断が難しい。はっきりした境界線があるわけではなく、特別な状況や方言、社会的慣習等によって容認度が違ってくる場合もあるからである。

境界線を引くのが難しいのは境界線を引くこと自体が出来ない場合も多いからだ。例えば色彩の範疇化。赤といっても、真っ赤な赤からだいたい色に近いものまである。典型的な赤、典型的なだいたい色は全く違

うが、その中間段階的なものは存在する。その境界線というのはもともと存在しない。

カテゴリー（他と区別すること。範疇化）というのは人間が勝手に決めたもので、もともと存在しているわけではない。だから時には両方の範疇に入る場合もある。薬とお酒は別物だが、養命酒となるとお酒と薬の両方の意味合いを持つ。（したがって酒屋にも薬屋にも置いてある。）中間段階といっても、その種類は一つではない。

このような段階性や曖昧性があるからこそ、典型からの応用や延長の程度によって用例の範囲が違ってくる。それは個人や社会はもちろんのこと、言語によっても異なってくることを意味している。人間が本来持っている、ものを分けるという特徴が個別的にそれぞれの言語に表れるからである。だから英語では英語だけに見られる特徴が存在することになる。そして先ほども述べたように所有構文にははっきりと人間中心のなとらえ方が備わっている。

話が逸れたが、A's Bの他の用法と日時表現が全くの異質に思われたのは、こういった段階性や曖昧性では説明できなかったからである。人を日時表現にまで拡大すると、何でも可能なのではないかというくらいの延長となってしまう。そこで全く別の視点から人と日時の共通項を見つける必要があった。

結果的にこの二つをつなぐものは何であったか。それは典型的な例はいずれも現場でAの内容が決まってくるという特徴であった。直示的 (deictic) と呼ばれるものであるが、その点で共通していたのである。具体的な例で言えば、人といってもさまざまな表現があった。私、あなた、彼女、というふうに一人称、二人称、三人称の区別があり、その順にAの顕在性は落ちていく。これらの名詞の中身（正体）は現場の発話によって初めて内容が具体的にわかる。つまり「私」の正体はしゃべっている人が確認できて初めてその人が特定できる。

一方の日時の表現の代表的な例であるtoday's

newspaperのtodayも発話の現場にいて初めてAの内容が特定される。その点で共通していたのである。

## 2 Aの内容の拡張について

Aは先ほども指摘したように第一人称である私の顕在性が一番強く、次に目の前にいるあなたに相当する第二人称となる。そして第三人称となると必ずしも目の前にいる必要はない。目の前にいる三人称の場合もあるが、(大半の例となる)二人称のように必ず目の前にいる存在というわけではない。

本来目の前で話している表現が、用法の拡張によって現場とは切り離された表現となることもある。たとえば次のような例だ。

That girl's school is over there.

意味は「あの少女の学校はあの向こうにある」という意味だが、このgirlが会話中に目の前にいる特定の少女を指している場合、直示的な表現ということになる。

しかしこれが目の前の少女ではなく、話の中で出た場合の複数の少女達の学校という場合(書くとThe girls' school is over there.となる)直示的ではない。そうなる実際の場面と離れていく。

この表現は書き言葉であれば誤解は生じにくいだが、話し言葉となると「女学校」(girls school)という意味の語と同じ発音であることからそのような意味に受け取られ、完全に直示的ではない表現となってしまう。女学校となるとA's Bではなく、ABという形式であるが、発音の一致が他の表現に本来の意味以外の解釈を帯びる手助けをすることになる。

小学校低学年のとき、学校で「科学」と「学習」という教材を買っていたが、その中に次のような文があったことをよく覚えている。

「ここではきものをぬいで下さい。」

ひらがなであることがミソだが、これは読み方に

よっては「ここで履物を脱いで下さい。」とも「ここでは着物を脱いで下さい。」とも読める。実際には場面からどちらか判断がつくが、文の上では両方の可能性はある。

すべての例でこうなるわけではない。しかし語と語の組み合わせによってはどう解釈するかが人によって分かれる場面も出る。先ほどのthe girls' schoolはgirlにアポストロフィーエスがついた場合と複数発音が同じだから解釈に揺れが生じる。

実際A's Bの形式では、直示的な表現と単なる概念を表す語は区別なくAに表れる。Tom, Lucyのように、会話の現場にいる場合と会話上だけで出て来る場合もそうだ。一方で名詞によっては直示的ではない場合が圧倒的に多い。会ったことのない有名人の名前などは普通そうだ。先ほど例に出したgovernmentやaudienceのような語は場合によっては両方あるが、直示的な表現ではない場合が多い。

言語にはどんな場合にも段階性という特徴がつきまとうが(つまり典型的な例とそうではない例)Aも直示的なものからそうではないものまで幅があるのである。

## 3 AがBの内容を意味するようになった根拠と考えられる例

本来のA's Bの多くの用例ではAがBを特定するという性質があり、基本的にはAの顕在性がBより高いのが根底にあった。しかしそうではない表現もあった。たとえばtwo days' journey(2日間の旅行)やa women's college(女子大)などの例である。これらはTaylorも例外として(それぞれgenitives of measure, descriptive genitivesとして)扱っていた。この場合のAはBの中身を表しており、その意味的な性格から英語ではAからBを特定できない。

しかし一方でA's Bの用法の典型的な例でもAがBの内容を指す場合もあった。たとえばmy bookという

例だ。この表現にはいくつかの意味がある。「私が書いた本」「私が持っている本」など、AとBの間で常識的に考えられ得る、想起される内容、あるいは状況によってAとBのつながりが可能な場合だ。そしてAとBの意味が最終的に決まるのは文脈や使われている現場の状況からだ。

本来のA's Bの用例に見られる意味はAがBに対して何らかの行為をするというのが基本であるが（だから「私が書いた本」とか「私が持っている本」という意味が自然と出て来る）、前提としてAとBの間で考えられる関係のすべてが表現として認められるのであるから「私のことが書かれている本」というAがBの中身を表す意味も出る。このときのAとBの意味関係はtwo days' journeyと同様だ。

このように、内的な意味がA's Bの用例の典型例にも見られることが、典型的ではない例にまで浸透し拡張されたのではないかと推測される。それがtwo days' journeyのような例を生み出すきっかけとなったと考えられるのである。

#### 4 日時と場所の表現

以上のような流れで、todayのような典型的な直示的な日時表現が、直示的ではないさまざまな日時表現にも拡大していったことは想像できる。人の場合も同様であった。だから日時も直示的な表現から、直示的ではない、単に日を意味するday（したがってビートルズの歌で有名なA hard day's nightのような表現）やdayと対照的なnightを意味する語が使われたa good night's sleepのような表現もこの拡張例と考えることができる。（後者の例はgood nightという慣用表現であるため、単なるnightとは一味違うが、時を表す表現であることに変わりはない。）

最後に場所の表現に関して付け加えておくことで補足を終わることにしたい。

場所を意味する語がその場所に住んでいる人達を意

味することがたびたびある。よくコンサートで外人のアーティストが「こんばんは、トウキョウ」と言う。この場合のトウキョウは東京という都市を指しているのではなく、東京に住んでいる人達という意味だ。

場所を意味する（特に国の名前）名詞がA's Bで表現されるのは、人を意味することもあることから人としての認識が国という名詞の背後にあるからだとは述べた。これはgovernmentのような語が背後で政府を動かしている人そのものであることと理屈は同じである。国はそこに住む人達によって（通常は）動かされるからである。

しかし、場所を意味する直示的な表現は名詞としてはすぐに思い浮かばないものの、たとえばhereとかthereのような語は直示的だ。特にhereは時を意味するtodayやtomorrowと同じで、まさに現場で場所が特定される。

todayやtomorrowは名詞と副詞の両方でしばしば使われることから名詞という認識は常にある。しかしhereの場合、名詞としての使い方もないわけではないが、圧倒的に副詞としての用法が主であることから、hereやthereが場所の名詞を指すA's BのAというつながりがすぐには想起されない。そのため人との関連からのみこの用法を説明してきた。

ただ、直示的であるという性格はAの典型的で、最も重要な特徴である。そしてそれは関係代名詞にも当てはまる。関係代名詞も、前に出てきた文章であったり特定の名詞を指し示す。その性格は時間的なものというよりも、（特に書面の上での場合は）場所的な性格に近い直示的表現と言える。

したがって場所を示す語がA's BのAの位置に来るのは、人という点からの拡張に加え、直示的な表現であるhereのような場所を意味する語からの拡張という、両方の面で説明できるのである。

## 謝辞

この論文は元早稲田大学教授であられた松坂ヒロシ先生からの私信で、説明が不十分と思えたことから補足した内容である。松坂先生にこの場をお借りして御礼申し上げたい。

## 参考文献

- Deane, Paul (1987) "English Possessives, Topicality, and the Silverstein Hierarchy", *BLS* 13, 65-76.
- Hayase, Naoko (1993) "Prototypical Meaning VS Semantic Constraints in the Analysis of English Possessive Genitives", *English Linguistics* 10, 133-159.
- 平見勇雄 (1997) John's picture, a picture of John についての解釈の違いはなぜ生まれるのか — 認知言語学的観点からの説明 吉備国際大学社会学部研究紀要 7, 279-284.
- (2016) 日時の表現に関する再考察 2 吉備国際大学研究紀要 人文・社会科学系 26, 91-99.
- (2019b) 『英語の所有構文に関する考察』 ふくろう出版.
- 池上嘉彦 (1978) 『意味の世界』 NHKブックス.
- (1981) 『「する」と「なる」の言語学』 大修館書店.
- (1991) 『英文法を考える』 筑摩書房.
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago : The University of Chicago Press. (池上嘉彦, 河上誓作 他 (訳) 『認知意味論』 紀伊国屋書店 1993)
- Langacker, Ronald (1993) "Reference-Point Constructions", *Cognitive Linguistics* 4-1, 1-38.
- Leech, Geoffrey N. (1971) *Meaning and the English Verb*. Longman.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey, Leech and Jan Svartvik (1972) *A Grammar of Contemporary English*, Longman, London.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- Taylor, John R. (1989b) "Possessive Genitives in English", *Linguistics* 27, 663-686.
- (1994) "Subjective and Objective Readings of Possessor Nominals", *Cognitive Linguistics* 5-3, 201-242.
- (1996) *Possessive in English*, Oxford University Press, Oxford.